

(勲功記念碑 表面運名)

勲功記念碑

陸軍二等勲章 松本 義昌	陸軍三等勲章 所賀 柳太郎	陸軍二等勲章 佐藤 安左衛門	陸軍二等勲章 高司 作治	陸軍二等勲章 狩生 房太郎	陸軍二等勲章 狩生 富五郎	陸軍二等勲章 井上 彦治	陸軍二等勲章 佐藤 惣太郎	陸軍二等勲章 後藤 繁太郎	陸軍二等勲章 山中 元吉	陸軍二等勲章 川野 千代助	陸軍二等勲章 松本 俊作	陸軍二等勲章 長沢 民五郎	陸軍二等勲章 狩生 琢麿	陸軍二等勲章 高司 幸太郎	陸軍二等勲章 河野 松五郎	陸軍二等勲章 高司 安太郎	陸軍二等勲章 狩生 郡太郎	陸軍二等勲章 河野 保太郎	陸軍二等勲章 長沢 満五郎	陸軍二等勲章 高司 栄作
陸軍二等勲章 高司 特三郎	陸軍二等勲章 河野 庄太郎	陸軍二等勲章 高野 辰五郎	陸軍二等勲章 高司 伊佐	陸軍二等勲章 河野 茂吉	陸軍二等勲章 河野 岩太郎	陸軍二等勲章 荒川 武市	陸軍二等勲章 古田 太十郎	陸軍二等勲章 今山 弥曾吉	陸軍二等勲章 河合 宇一郎	陸軍二等勲章 岩崎 峯太郎	陸軍二等勲章 松本 岩雄	陸軍二等勲章 高司 良作	陸軍二等勲章 藤原 寺広吉	陸軍二等勲章 岡部 角太郎	陸軍二等勲章 狩生 勘二郎	陸軍二等勲章 狩生 道佐	陸軍二等勲章 狩生 計佐治	陸軍二等勲章 狩生 梅五郎	陸軍二等勲章 狩生 長四郎	陸軍二等勲章 新飯 篁五郎

(この五文字、上部古横書)

陸軍勲章 後藤 謙吉	陸軍勲章 佐藤 由佐	陸軍勲章 古田 志太郎	陸軍勲章 狩生 篁太郎	陸軍勲章 水原 茂吉	陸軍勲章 生武吉	陸軍勲章 高司 秀太郎	陸軍勲章 川源太郎
---------------	---------------	----------------	----------------	---------------	-------------	----------------	--------------

今次の日華事変から、太平洋戦争にかけて動員された数がどんなに大きかったか、またその戦線がどれほど広大であったか、そして海外の第一線で戦った兵士の犠牲が、いかに多いことか。これを見て、五十戸にも満たないわが元田の村人同志が、顔を見あい手とり合いながら、戦争というものの恐ろしさを、今更ながら身近に感ずることと思う。

私達は、せめて今次の戦争に従軍して、生き残った人々の記録をまとめ、戦後の生活を想い出して、戦争が家庭をどれくらい破壊し、平和が何ものにもかへがえのまない尊いものであるかということ、後世に知らせねばならないと思っている。

戦後の生活

戦時中の国内のこと

戦後の生活で良どの家でも、麦飯と甘藷が主食となつたほど、食生活は厳しかった。この当時は床木と大板本が一緒になつて明治村といつていたが、毎月始めに村役場に各部落の伍長を招集して、食糧増産について具体的な事項を指示した。どくら、米・甘藷・大豆・菜種の生産に増強を呼びかけていた。

これがため、原野や川端の空地を開墾して、部落民全員で食糧の増産に取り組んだ。また稲作にしても病虫害の防除にしても、また苗代田から本田に植付するまで、

すべて共同作業で一致協力し、収穫の多くを供出して来たのであった。

この外、航空機燃料の生産のために、当時の農業会へ現在の農協への経営で、小さな松根油製造工場が、元田の前に設置された。今の市野瀬新十郎さんの前、安藤信輝氏所有の島地に、村内各部落から運ばれた松の根株が集積され、毎日三、四人の人達が交替で、それを割って釜に投入して燃やし続けた。醬油のような色をした松根油はドラム罐に入れて送り出された。

また金属の不足から、各家、各部落、各村にある銅鉄類の供出が強制された。まず尺間神社の青銅製神馬・寺の釣鐘・古刀・仏具・箆笥の取手に至るまで対象となった。なかでも風呂釜は三軒に一個の割合で残し、隣組で共同風呂となったのだから、日本の国情もせつばつまったものがある。しかもこれら供出されたものが、すべて兵器や燃料になるまでに至らず、ある所に集められたまま、野ざらしになっただけで、苦しかつたという。今思い出してみると、苦しかつただけで、また懐かしさよひとしかおである。

③ 婦人会の働き

銃後をききえた婦人会の力は大きかった。男手のする仕事の外に、出征兵士にささげる千人針は、戦時でなければ見られない風景であった。腹巻にする程度の中と長さの白木綿に、道行く一人一人から針をもって貰い、糸の結びが千になつて仕上げる。心のこもつたお守りとして、ほとんどの出征兵士が身につけて来たのであった。

その外、出征兵士の送り出し、戦死者無言の凱旋の迎え、平間、出征家庭への農作業の奉仕、防空訓練への出勤など、銃後活動の主役をつとめたものである。

爆弾投下

昭和二十年に入ると、佐伯に海軍航空隊があったため、米國航空母艦から艦載機が飛んで来て、山合いの元田の上空で旋回し、人影を見つけると低空飛行して、機関銃で掃射する。それがため負傷した人はいなかったが、田圃には何発かの弾が落ちてきた。

昭和二十年三月十八日深夜、ドスーンと地響きのする大きな衝撃が目覚め、家の中寝床からとび起きた。程近い床木の岡田部落に爆弾が落ち、二名即死した時のことであった。家は木、燕みじんに吹っ飛び、深さ五尺直徑十尺おまりの大穴があいた。爆風のため蒲団の綿が裏一面に散り、まるで雪が降ったように見えた。その上、色とりどりの美しい布きれが掛々にかかり、人々を二重に驚かした。それ及町の呉服屋が反物を疎開していたものに、爆弾が当たったためだったという。

これより外に、床木方面では大向・旧小學校下、あるいは山に爆弾が落ちたことがあり、そのつど婦人会員は穴埋めにかかり出されたものである。

二十年の春ともなると、夜となく昼となく、警戒警報や空襲警報の鐘の音が聞こえてくる。やがてB-29という戦闘爆撃機二十機ばかりの編隊が、ゴンゴンゴンゴンとエンジンのごう音を、大地に響かせながらゆうゆうと頭上はるか高くを飛んで行く。大体七、八千尺の高度であったそうだが、私たちにはこわごと、たどじつと仰ぎ見るだけであった。

二十年の六月、茶摘みの頃であった。またB-29が来

たかなと思ふ間もなく、尺間方面の上空から、物すごい
炸裂音が聞こえてきた。下から打ち上げた高射砲の音が
爆弾の音か、お互い顔を見合せた。

やがて中ノ谷峠から神野に入りこむ山の中腹に、B-
29が撃墜されたという知らせが伝わった。

それから四五時間すぎた午後三時頃、目かくしされた
アメリカ兵一人と、何人かの死体を乗せた一台のトラツ
クが、植松の方へ下った。アメリカ兵の死体は宇藤木と
植松に仮埋葬したが、生き残った一人の兵士は横柄な態
度で、なかなかに口を割らなかつたということであつた。
「わいわいは遠からず戦争に勝つんだ」という、自信の
ほどを見せたものであつたのだらうか。

沖繩の学童集団疎開

空襲はいつあるかも知れなかつたが、学校は休校しな
かつた。大間小学校では、主に部落のお宮の森に学童を
集め、教師を一人ずつ配置して、勉強をつづけることに
した。元田では玄瀨の火伏さん(地蔵堂)にかくれ場所を
見つけ、腰掛だけを学校から運び、青空教室を開いた。
こうして授業をうけた学童たちの中には、昭和十九年
末以来沖繩から集団疎開して来た学童も、何人か交つて
いた。

大間小学校に来た集団疎開組は、鹿兒島県・熊本県、
宮崎県であふれてきた人々で、県南の方から木瀬、小野
市・川原水、直見・切畑・上野・大間・赤木の各小学校
に配置されたものであつた。学童は四年生から高等科二
年まであり、四十八名の一集団に引率教師に男一名、女
一名が決められていた。この集団疎開は、文部省の命令
で実施されたものである。

昭和十九年九月八日、沖繩の那覇を出発した後集団は、

いくつかが船団に分かれて、普通一泊二日で可能なとこ
ろを十日かかつて、やっと鹿兒島港に入港した。先鋒集
団の船が米清水堰に沈められたことがあつたから、十分
慎重に航行したためであつた。

これら疎開して来た学童も一級集団は、希望者であつ
たため、あまり貧困な人達ではなかつたという。

大間小学校区では、前田という男の教師の引率のもと
に、お寺(西音寺)に宿泊した。また別に元田には、潮
平という名客の一家族が、児玉輝喜さん宅の空家に住み
つき、日傭いに出て生計を立て、時には部落の共同作業
に参加したりして、所の人達となじんでいた。

沖繩の子供達には、平良・玉城・金城・島袋・宮城な
ど独特な名字があつたり、油濃いものを好んだり、習慣
がかなり違つていた。また言葉のアクセントが異なり
それによつと小極であつて委縮して見たように見えた
のも、異境の地にきて、人知れぬつらい思いをしていた
ためであらうか。

八月十五日正午、日本が敗れ、無条件降伏したので、
玉音放送があつた。あな午は全く静寂であつた。時間ば
止まつているようにさえ思えた。

やがて、濁泥と流れる太い涙を、どうしてもとめるこ
とができなかつた。

沖繩の子供達とどんなお別れをしたか憶えていないが
彼等疎開集団は長崎県諫早の海軍基地に集結し、二十年
十一月に故郷沖繩へ出帆したということである。

以上集団疎開の大要は、当時引率して来られた河島弘
宣氏(現上海西華東雲中学校長)から承つたことも加えてある
ことを書き添えておくこととする。